



## 香雪美術館「千手観音二十八部衆像」について

田中，水萌

---

(Citation)

美術史論集, 24:105-115

(Issue Date)

2024-02-17

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100493542>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100493542>



## 香雪美術館「千手観音二十八部衆像」について

《キーワード》 仏教絵画 眷属 星宿

田中水萌

### はじめに

香雪美術館に所蔵される「千手観音二十八部衆像」(以下、香雪美術館本もしくは本図)は、画面の中央に十一面四十二臂の千手観音坐像を配し、両脇の岩上に眷属の二十八部衆をそれぞれに十三ずつ、上部に風神雷神を配した構図である(図1)。

千手観音は皆金色であり、蓮華座に結跏趺坐する。頭上に十一面を頂き、四十二の掌には千眼をあらわす眼がひとつずつ描かれている。各手の持物は蓮華や日月、独鈷杵や鉞斧、剣、盾など通例のものであり、胸前で合掌して腹前に鉢を持つ。光背の頭光および身光の周囲に宝相華唐草が、透彫を思わせる意匠で描かれており、また岩上の台座に框座が描かれていることから、彫像を写した可能性が指摘される<sup>①</sup>。

千手観音が坐す岩の下には水が流れ、水面から龍神とその眷属が姿を現し、千手観音に珊瑚のような供物を捧げている。背景には山水が描かれ、観音の聖地である補陀落山が表現されていると思われる。

る。上空の風神雷神の間に北斗七星が描かれる点は、ほかの千手観音像には例がなく、本図の制作目的にかかわるモチーフであると考えられる。

本図は『玄庵鑑賞』に宅間澄賀筆の「千手曼荼羅」として収録されるほか、米澤嘉圃氏が『國華』に村山長拳氏所蔵の「千手観音二十八部衆図」として紹介され、早くから坐像の千手観音を本尊とする作例として知られていた<sup>②</sup>。

千手観音二十八部衆の絵画作例は少なく、本尊を坐像とする作品は本図のほか、東京国立博物館が所蔵する白描図像(以下、東博本白描図像)、細見美術館<sup>③</sup>(以下、細見美術館本)、根津美術館(以下、根津美術館本)、滋賀・大清水寺<sup>④</sup>(以下、大清水寺本)、福井・おおい町懺法講<sup>⑤</sup>、京都・仁和寺、京都・永観堂禪林寺<sup>⑥</sup>(以下、永観堂本)、アメリカ・ボストン美術館が所蔵するものなどがある。諸本はおおむね十三世紀以降に制作された作品であり、本図は十四世紀頃の制作であろう。

千手観音二十八部衆像の比較的古い作例としては四天王寺が所蔵

する彩色の圖像や、相国寺慈照院が所蔵する二十八部衆像のみの双幅（以下、慈照院本）など十二世紀から十三世紀の作例がある。

本論では、二十八部衆像の各圖像について、尊名の比定を試みつつ、本図の眷属の圖像的な根拠について検討する。そのうえで、千手観音の頭上にあらわされる北斗七星に着目し、本図の制作目的を検討する。

## 二十八部衆の構成と尊名の比定

先行研究でたびたび指摘されるように、二十八部衆はそもそもの成立や尊名の組み合わせ、さらに現存作例にいたるまでの圖像の成立において不明な点が多い。千手観音の眷属については『千手経』（大正蔵一〇六〇）に説かれ、二十八部衆としては善無畏訳『千手観音造次第法儀軌』（大正蔵一〇六八）や、その解釈を行った定深撰『千手経二十八部衆釈』（大正蔵二二四三）に尊名が挙げられている。

近年、京都・妙法院金堂（三十三間堂）の二十八部衆像の尊名の比定や配置の変更が行われた。<sup>11</sup> それらの彫像や、画中に尊名の記載がある細見美術館本、永観堂本の間においても、すべての尊名や圖像は一致しない。二十八という数も、風神雷神を含めて二十八部衆を構成する場合と、含めない場合とがある。

本図の二十八部衆は、動きの少ないほぼ直立した体勢で、風神雷神を含めて左右十四体ずつ対となるように描かれている。大清寺本とかなり近い圖像であることが指摘され、使われる色や着衣の模

様などは異なるが、構成や配置、像容、持物はほぼ一致する。

像容をはじめ細部に若干の差異はあるが、構成は根津美術館本の二十八部衆とも一致し、この二十八部衆の組み合わせには、型紙となる白描圖像の存在がうかがえる。

各尊名の比定は困難であるが、細見美術館本および永観堂本と比較し、尊名を明らかにしうるものは記載の通りである（図2）。

右1 密迹金剛、左1 那羅延堅固（八部力士）

右2 婆藪仙、左2 大弁功德天

右3 大梵天王、左3 帝釈天王

右4 金色孔雀王、左4 水瓶を捧持する有角の男性像

右5 提頭頼吒王、左5 毘楼勒叉

右6 毘沙門天、左6 毘楼博叉

右7 法螺貝を吹く鬼形、左7 乾闥婆か

右8 花籠を持つ童形、左8 簫箏を吹く鬼形

右9 龍王か、左9 伊鉢羅

右10 迦楼羅、左10 一面四臂像

右11 一角の鬼形、左11 獅子冠（皮）を被り山羊を抱く

右12 阿修羅、左12 神母女

右13 摩睺羅伽か、左13 薩遮摩和羅

右14 雷神、左14 風神

いわゆる仁王（金剛力士）、婆藪仙、功德天、梵天帝釈、四天王

は二十八部衆として描かれることが多く、それぞれが左右対の位置に配され、画面上は下辺、つまり二十八部衆の前方に描かれることが多い。

比較的古い作例として挙げた慈照院本にはこのような特徴は見られず、むしろ四天王や十二神将などの図像として転用される神将形の姿がみられ、二十八部衆としての図像において、ある程度の定型が成立するより以前の様態を示すように思われる。<sup>13)</sup>

ほかの作例とも共通する特徴を持つ、赤身炎髪憤怒相の三面六臂像であらわされる阿修羅や、合掌し髪を垂らす老齢の女性像にあらわされる神母女も、尊名の比定が容易である。

右4は左右に割れた顔の下から別の顔が現れており、この図像は細見美術館本、永観堂本ともに金色孔雀王とする。自ら両手で割り開く場合と、自然と割れて手には武器等を持つ場合があり、本図は前者である。

細見美術館本による薩遮摩和羅とされる図像や本図の左13は、頭に孔雀を頂き武装するという特徴を持つ。もとはこちらが金色孔雀王であったのではないだろうか。細見美術館本制作段階での錯簡か、もしくはその前段階から誤って表記されていたものを写したと考えられる。

右10迦楼羅は永観堂本にもとづき、鳥頭に炎髪で有翼、笛を吹くものを迦楼羅としたが、細見美術館本の迦楼羅は頭に鳥を頂く鬼形が、右手で法螺貝のような大きな巻貝を持つ。香雪美術館本右10の下に描かれる右7の図像もまた、法螺貝のように大きな巻貝を口に

当てて吹く鬼形の姿である。

東博本の白描図像では、孔雀を頂く神将形と金翅鳥か鳳凰のような鳥を頂く神将形が対の位置に、その後ろに法螺貝のような巻貝を吹く神将形と筆簪を吹く神将形が対の位置に描かれている。<sup>14)</sup>

どちらが先行する図像なのかはわからないが、頭に鳥を頂くという特徴と、法螺貝を持つという特徴が合わさり、一つの眷属となつたか、もしくは一つの眷属が持つ特徴が二つの眷属に別れたのではないだろうか。

乾闥婆は細見美術館本、永観堂本に共通する特徴として頭に馬を頂く点があげられる。馬といえは緊那羅が想起され、三十三間堂二十八部衆像の再編に際しても、馬を頂き鐃鈸を持つものが緊那羅と改められたが、乾闥婆も馬と無関係ではないため、本図においては合掌し馬を頂く左7を乾闥婆とする(図3)。<sup>15)</sup>

興福寺八部衆像をはじめ、『図像抄』や童子経曼荼羅の本尊である乾闥婆、もしくは梅檀乾闥婆は獅子冠(皮)を被る神将形の姿であらわされる。<sup>16)</sup>和歌山・金剛峯寺「仏涅槃図」(応徳三年(一〇八六))においては獅子冠を被る神将形が緊那羅とされており、京都国立博物館「釈迦金棺出現図」(十一世紀)には当初のものではないが馬頭人身像に墨書で「健達婆」と記されていることから、両者の図像が混同されることは頻繁に起こり得たのかもしれない。

本図では左11の図像が獅子冠のような獣冠を被るが、甲冑などを身に付けておらず、こちらが乾闥婆としてあらわされているのか判断できない(図4)。

## 香雪美術館本二十八部衆の図像と「靈山変相図」釈迦の眷属

北宋・雍熙二年（九八五）に制作された清凉寺釈迦如来立像の納入品である「靈山変相図」版画の釈迦の周囲には十大弟子を除くと二十の眷属の姿があり、仁王や龍王をはじめ天部等も、左右で対となるよう配されている。

「靈山変相図」の仁王周辺の群像部分については、増記隆介氏によつて仁和寺『別尊雜記』卷十七の千手観音二十八部衆像と構成の近似が指摘されており、本図をはじめ大清寺本、根津美術館本の二十八部衆像には、いくつか類似する特徴を備えた眷属の姿が描かれている。

左4有角の男性像（図5）はほかの二十八部衆像にはみられない眷属であるが、「靈山変相図」の画面に向かって左端、龍王の後ろに有角の男性像があらわされている。頭頂で鬘を結うような髪型であったのかもしれないが、毛筋はなく角のように見える。

『観音義疏』には三十三身の緊那羅が人の姿に似て角があると説くが、<sup>18</sup> こういった経典にもとづく図像であろうか。仏涅槃図の釈迦の死を嘆く会衆の中にも類例がみられる。

左10一面四臂像（図6）は屈臂した右第二手に剣、左第二手に三鈷鈴を持って振り上げ、第一手は第二指同士を合わせて他の指は握り、第一指上に三鈷杵を乗せる。左10に類似する図像として、東博本白描図像中に屈臂した右第二手に剣、左第二手に三鈷鈴を持ち、

左右第一手を合掌する眷属が挙げられる。またアメリカ・メトロポリタン美術館が所蔵する「観音経絵巻」（十三世紀）に一面六臂の阿修羅と思われる眷属が描かれるが、こちらは屈臂した右第二手に剣、左第二手に三鈷杵のような物を持ち、第一手を組み合わせて胸前で握る。左第三手の腕は見えているが、手の先までは描かれていない。

「靈山変相図」には対となる一面四臂像があらわされており、向かつて右の図像は屈臂した右第二手に剣、左第二手に三鈷鈴を持って振り上げ、第一手は左右ともに手の先が隠れているので持物が何かはわからない。一方左の図像は左右第二手に日月を捧持し、第一手は両手を合わせて握り、第一指上には折尺のような持物を乗せている。<sup>19</sup> これらは阿修羅を示す持物である。

香雪美術館本左10をはじめとする一面四臂像の図像は、このような対となる眷属の図像的特徴が合わさり、一つの眷属の図像となったのではないだろうか。本図では一面四臂像と阿修羅は対の位置からは微妙にずれるが、東博本の白描図像では対の位置に一面三目四臂で日月と思われる円相を捧げ持ち、胸前で合掌する阿修羅が配されている。

左11は、獅子冠をかぶり胸前に犠牲と思われる山羊を抱いている。これは大清真寺本、根津美術館本も同様であり、ほかに類例として、孔雀のような鳥を片手で抱える図像を描く四天王寺本、戌神が胸前に犬を抱く図像を描く奈良・唐招提寺「薬師十二神将像」がある。

このような動物を胸前に抱く眷属は「靈山変相図」にも見られ、

獅子冠を被り獅子を抱く神將形と、獸冠を被つてはいないが鹿のような有角の獸を抱く神將形が対となつてあらわされている。

このことから、香雪美術館本左11のような獅子冠の眷属も、「靈山変相図」における対となる眷属のような図像が組み合わされ、獅子冠を被り有角の獸を抱く姿となった可能性が考えられる。

香雪美術館本は「靈山変相図」とは時代的な隔たりはあるが、「靈山変相図」の菩薩らの面貌の特徴が「釈迦金棺出現図」にもみられ、建仁三年（一二〇三）に再興された東大寺南大門仁王像の像容が「靈山変相図」仁王と似るように、本図のもととなった図像も、北宋よりもたらされた図像だったのではないだろうか。

### 北斗七星と本図の制作目的

最後に、本図の千手観音の頭上に描かれる北斗七星について検討を加える。本図の上部には、小さな七つの円相を柄杓型に配して北斗七星が描かれ、柄の部分にある武曲星の横には、さらに小さな円相で輔星もあらわされている。

北斗七星をはじめ、天空の星々は古来より広く信仰された。もとは陰陽道とともに日本へもたらされたが様々な神仏と習合し、妙見菩薩や虚空蔵菩薩、日吉山王上七社、摩多羅神像などの図像には画面上部に北斗七星があらわされ、密教における北斗法では除災の本尊として北斗曼荼羅が制作された。『台記』や『九条殿遺誠』などからも知られるように、北斗七星への信仰は平安貴族らの日常生活

にも浸透しており、彼らは自身の運命を司る属星を非常に重視していた。<sup>(20)</sup>

観音の図像としては、北斗七星と習合した七星如意輪の図像があるが、北斗七星を千手観音とともにあらわす作例は本図以外にはない。

北斗七星であるかはわからないが、星宿と千手観音については興味深い指摘がある。国立故宫博物院が所蔵する「宋人画千手観音像」(十二世紀)は、水中より湧出する千手観音立像を中心に、周囲に五仏や眷属等をあらわす。この千手観音は四十二臂ではなく、小手を加えた千本の腕を持ち、その外縁に近い手に十二宮を持つている。<sup>(21)</sup>

羅翠恂氏は北宋詩人・李復の詩を紹介され、十二世紀頃には星宿を持つ千手観音の図像が存在したことを示された。<sup>(22)</sup> 羅氏はこの星宿の意味について、農事を進行させるような儀式と関係するとされ、「宋人画千手観音像」の持物に十二宮があることもまた、天候の順調と五穀豊穡を祈る儀式と関係すると述べられている。

ほかに眷属の二十八部衆と星宿との関係がうかがえる資料として、白描図像「二十八部衆并十二神將図」(大正蔵図像部七卷、正平十四年(一三五九)写)が挙げられよう。

この図像は巻首を失っており、どういった性格のものかはわからないが、二十八部衆の尊名の下に方角と二十八宿が割り振られている。<sup>(23)</sup> ただし尊名は「満善車鉢眞陀羅」「修羅乾闥婆」のように複数の天部を含むこともあり、眷属の図像も「千手観音二十八部衆像」の諸作品にみられるような眷属に通じるものはほとんどない。巻末に

「属星祭秘法」<sup>義浄撰</sup>云「北斗七星能護五姓人攝提一七星能攝十二神窻合属人星而増富寿云々」<sup>(26)</sup>とある点からも、星宿に関する図像である可能性が考えられる。

以上、千手観音や二十八部衆と北斗七星および星宿の關係について、可能な限り取り上げてみたが、両者の間に經典等を典拠とする關係性を明確には見出せなかった。

本図のほかに、通例では北斗七星が描かれない作例に北斗七星が描かれたものとして、文化庁所蔵の「熊野本地仏曼荼羅」(十三世紀)、奈良国立博物館所蔵「両頭愛染明王像」(十四世紀)、大阪市美術館所蔵「荼吉尼天曼荼羅図」(十五世紀)などがある。<sup>(27)</sup>これらの作例をふまえて本図の制作目的を考えると、単に北斗七星自体が持つ除災や招運などの力を付与するために描かれた可能性もあるだろう。

## おわりに

本稿では香雪美術館本の二十八部衆の尊名の比定や、北斗七星の意味を中心に検討を行った。諸本を比較することで、型紙となる図像から転用して二十八部衆像を構成する可能性が見出せた。今後はさらに比較する作品を増やして図像の引用・転用關係の検討を進めたい。

例えば立像の千手観音が本尊として描かれる愛知・護国院所蔵の「千手観音二十八部衆像」(十三～十四世紀)には、永観堂本や香雪美術館本の二十八部衆に通じる図像がいくつか転用されている。<sup>(28)</sup>さ

らに護国院本における背景の山中より立ち上る特徴的な雲は、香雪美術館本の山中の雲の形と極めて近い。

また水面から龍王やその眷属が観音に宝珠を捧げる図像は、高麗より伝来した京都・大徳寺や奈良国立博物館が所蔵する「水月観音(楊柳観音)像」にも見られる。高麗仏画といえば妙満寺や親王院が所蔵する「弥勒下生変相図」には八部衆の姿が描かれている。こういった八部衆のみが描かれる作品の図像を検討の対象とすること、今後の課題としたい。

## 註

(1) 『中之島香雪美術館開館記念展「珠玉の村山コレクション」』中之島香雪美術館図録、二〇一八年

(2) 箱の蓋表に「千手曼荼羅 宅間澄賀」とあるため、『玄庵鑑賞』にはそのような表記となるが、米澤嘉圃氏は「千手曼荼羅」はあくまでも俗称であり、作品名を「千手観音二十八部衆図」とされている(「千手観音二十八部衆図」『國華』六五五号、一九四六年)。

(3) 千手観音二十八部衆像について、複数作品の比較や研究史などを取り上げるものは以下の通り。

高崎富士彦「千手観音二十八部衆像」『Museum』二七九号、一九七四年、四～七頁

伊東史朗『日本の美術 三七九 八部衆・二十八部衆』至文堂、一九九七年

南谷恵敬「千手観音図像の調査研究」『鹿島美術研究 年報第十七号別冊』二〇〇〇年、五七～五九一頁

関口正之「千手観音二十八部衆画像」『國華』一四一七号、二〇一三年、

- 二三～二五頁
- 石川知彦「千手観音二十八部衆像」『國華』一五一一号、二〇二一年、六七～七〇頁
- (4) 白畑よし「新資料紹介 千手観音像」『古美術』三六号、一九七二年、八五～八六頁
- (5) 上野良信「高島町大蔵寺蔵千手観音二十八部衆像について」『滋賀県立琵琶湖文化館研究紀要』一、一九八三年、四九～五一頁
- (6) 宮島新一「絹本着色 千手観音二十八部衆像」『文化財調査報告』第三十七集、福井県教育委員会、二〇〇九年、三七頁
- 『わかさおおいの文化財』おおい町、二〇〇七年、五一頁
- 福井・おおい町懺法講本尊として用いられる「千手観音二十八部衆像」は、本図同様千手観音が坐像であらわれ、光背も工芸的な意匠が用いられる。おおい町を含む名田庄という地域はかつて蓮華王院の莊園であり、光背に三十三応現身像を表すことから、現在の三十三間堂本尊を写したものであると指摘される。
- (7) 『仁和寺と御室派のみほとけ』東京国立博物館、二〇一八年
- 仁和寺のご許可を得て実見の機会を得たが、本紙がかなり傷み黒ずんでいるため二十八部衆の図像は詳細にはわからなかった。箱書に「高祖院有永」とあり元は高野山にあったものであろうか。明治三十六年（一九〇三）隆応による修理銘がある。
- (8) 註3 石川 二〇二一年
- (9) ポストン美術館ホームページ (<https://collections.mfa.org/objects/25508/senju-kannon-the-thousandarmed-bodhisattva-of-compassion?ctx=acd13laf-abe74f03-b1ce-6c72edeb0098&idx=1>) 最終閲覧二〇二三年十二月三十一日
- (10) 南谷恵敬「四天王寺蔵千手観音二十八部衆像について」『美術史の断面』清文堂出版、一九九五年、十一～三九頁
- (11) 田中公明「千手観音と二十八部衆の謎」春秋社、二〇一九年、「二十八部衆の成立について」『密教図像』三八号、二〇一九年、三七～五一頁
- (12) 註1 香雪美術館図録、二〇一八年
- (13) 慈照院本は諸尊が整然と並ぶのではなく、水陸会や五百羅漢図のように岩場に降臨したかのような構図がとられる。婆藪仙や功德天、龍王の姿は見られず、梵天帝釈天以外の天部の姿が見られるほか、神母女も童子を抱く訶梨帝母の姿である。尊名の比定できそうなものは向かって右の左幅とされる方に密迹金剛、梵天、毘沙門天、金色孔雀王、伊鉢羅、迦楼羅、摩睺羅伽、雷神、右幅に那羅延堅固（八部力士）、帝釈天、阿修羅、乾闥婆、五部淨、滿善車鉢、神母女、風神である。
- (14) 鳥を頂く神将形も描かれるが、こちらは配置や頭光があることから四天王であると考えられる。根津美術館が所蔵する白描図像の「大元帥明王・四天王図像」（十二世紀）の持国天に近いのではないだろうか
- (15) 乾闥婆と馬の関係については『十二支考』に詳しい。
- 南方熊楠『南方熊楠全集第一巻 十二支考I』乾元社、一九五一年、三七二～三七四頁
- (16) 水野さや「八部衆像の成立と展開」中央公論美術出版、二〇一七年
- (17) 増記隆介「呉越国の絵画と日本——「応現観音図」を中心に」『アジア遊学』二七四 呉越国——10世紀東アジアに華開いた文化国家 勉誠社、二〇二二年、二七六～二九二頁
- (18) 大正蔵（一七二八）「緊那羅者。天帝絲竹樂神。小不如乾闥婆。形似人而頭有角。亦呼爲疑神。亦爲人非人。」
- (19) 註16 水野 二〇一七年
- (20) 増記隆介「院政期仏画と唐宋絵画」中央公論美術出版、二〇一五年、四四～四八頁
- (21) 熊田由美子「東大寺南大門仁王像の図像と造形——運慶と宋仏画——」『南都仏教』五五号、一九八六年、二七～五一頁

(22) 藤原頼長『台記』仁平元年(一一五一)八月七日条「終日念誦、入夜沐浴、着淨衣、向顯憲朝臣冷泉宅、奉拜北斗時帰東三条、身非神裔仍念誦、而拜北斗之時必有僧……」(増補史料大成第二五卷、臨川書店、一九八九、四九頁)

藤原師輔『九条殿遺誠』「先起称属星名号七遍……」(塙保己一編『群書類従 第二七輯』群書類従刊行会、一九五五年、一三六頁)

(23) 陳階晉「宋人画千手千眼観世音菩薩像與十二星座」『故宮文物』三六五、二〇一三年、九二―一〇三頁

「宋人画千手観音像」については、南宋の歴代皇帝が行った「迎請」という法会のような国家儀礼と関係する画像である可能性が示唆される(井手誠之輔「日本の美術 四一八 日本の宋元仏画」至文堂、二〇〇一年、二六―二八頁)

(24) 羅翠恂「南宋時代の千手千眼観世音菩薩像について―大足宝頂山と安岳仏慧洞に見られる新様式の像を中心に―」板倉聖哲編『アジア仏教美術論集・東アジアⅣ 南宋・大理・金』中央公論美術出版、二〇二〇年、二五―二八八頁

(25) 眷属の尊名および像容については、同じく大正蔵図像部七卷の東寺観智院蔵本「二十八部衆形像」とほぼ同じ内容が書かれているが、そちらには二十八宿の表記はない。また提頭頼吒王、毗楼勒叉王、毗沙門はそれぞれが守護する方角ではなく、南方七宿に対応していることから、何らかの典拠にもとづいて二十八宿を割り振っているのだと思われる。

(26) 「攝提一七星能攝十二神」について、『史記』天官書に「攝提者直斗杓所指以建時節故曰攝提格」「歳星一曰攝提、曰重華、曰應星、曰紀星」といった記述があり、「攝提」は前者の北斗七星の柄の部分にある星を指すと思われる。十二神は二十八部衆の後に十二神將の図像が続くため十二神將を指すか。ただし「十二神將異称」として諸經典の呼称、種字、『淨瑠璃浄土経』に説かれる十二神將の像容、その他經典に説かれる説を加

えたものであり、十二神將と星宿とのかかわりが述べられるわけではない。

(27) 奈良国立博物館「両頭愛染明王像」は画面上部の二円相中に八字文殊菩薩と蓮華座に乗る三角形、その間に円輪と北斗七星が、下部にはそれぞれ白象と獅子に乗り狩りをする矜羯羅童子と制吒伽童子が描かれている。北斗七星については、真言宗小野流で流布した頭上に北斗七星を配する愛染明王像や文殊菩薩を中尊とする北斗曼荼羅があることから、同じく小野流に近い環境で制作されたという説(谷口耕生「展示品のみどころ」両頭愛染曼荼羅「奈良国立博物館だより」一〇〇号、二〇一七年)や、真言律宗で重視された八字文殊、星宿信仰など複雑な信仰背景が想定されるという説(奈良国立博物館図録『奈良博三昧―至高の仏教美術コレクション―』二〇二一年)がある。また大阪市美術館「荼吉尼天曼荼羅図」は本尊である弁財天と荼吉尼天、聖天の三面をそなえた十二臂の三天合形像の頭光の中に小さく北斗七星があらわされる。この作品は表具の表棹の墨書から比叡山の里坊明徳院伝来であり、武運長久、息災安穩、商売隆盛を願って制作されたことが明らかである(MIHO MUSEUM、『KAZARI かざり―信仰と祭りのエネルギー』二〇一六年)。

(28) 護国院本において香雪美術館本、大正寺本、根津美術館本と共通する図像では左4水瓶を捧持する有角の男性像、右7法螺貝を吹く鬼形、左7乾闥婆(ただし合掌ではなく宝珠と剣を持つ)、右13摩睺羅伽か、左13薩遮摩和羅(ただし印を結ばず武器を持つ)、右11一角の鬼形などがある。

#### 図版出典

挿図1 香雪美術館提供、挿図2 筆者作成、挿図3―5 筆者撮影

謝辞 香雪美術館、奈良国立博物館、龍谷ミュージアム、滋賀県立

琵琶湖文化館をはじめとする各ご所蔵者さま、各機関の学芸員のみなさまには大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。本研究は科研費（19K23007）（21K12882）の助成を受けたものです。

田中水萌（たなか・みずほ）

二〇一四年 奈良教育大学大学院教育学研究科修士課程 修了

二〇一九年 神戸大学大学院人文学研究科博士課程 修了

二〇一七年～ 石山寺 学芸員

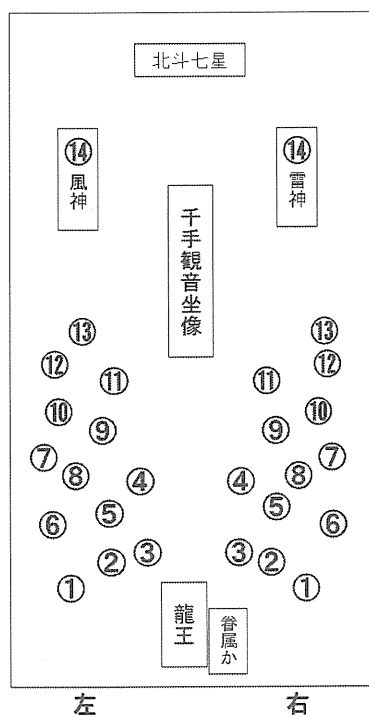


図 2

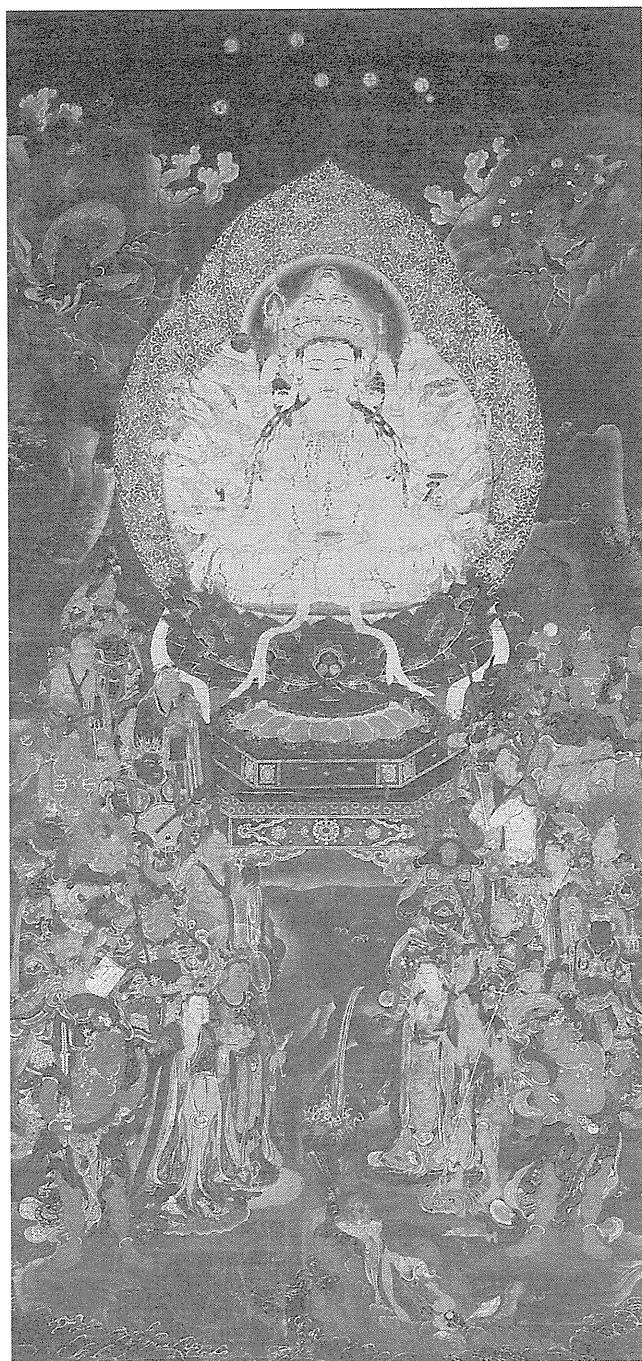


図 1 「千手観音二十八部衆像」香雪美術館、十四世紀



图4 左11



图3 左7



图6 左10



图5 左4